

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号：	14101
研究種目：	若手研究（B）
研究期間：	2011～2012
課題番号：	23792587
研究課題名（和文）	膵癌患者の体験および看護支援プログラムの検討
研究課題名（英文）	Experience of pancreatic cancer patients, and Examination of a nursing support program
研究代表者	
	犬丸 杏里（ INUMARU ANRI ）
	三重大学・医学部・助教
	研究者番号： 60594413

研究成果の概要（和文）：1.膵癌患者 18 名（男性 10 名、女性 8 名）、2.膵癌患者をケア対象とする看護師 10 名（女性 10 名）であった。1.闘病体験を記すために膵癌患者へのインタビューを行った。①化学放射線療法開始時、②化学放射線療法終了時、③手術終了時の 3 回インタビューを行った。当初の予定では 1 人の参加者に 3 回インタビューを行う予定であった。しかし、アプローチできた時期が手術終了後であったり、途中で治療が終了したりし、1 回で終了した場合もあった。そのため参加人数は当初予定より増やし、18 名へのインタビューを終えた。現在分析中である。2.膵癌患者への看護支援を記すために膵癌患者をケア対象とする看護師へインタビューを行った。10 名のインタビューを終え、分析を行った。その結果を「大学病院で入院治療する膵癌患者に対する看護ケア」というテーマで、平成 25 年 2 月日本がん看護学会にて発表した。参加者からのフィードバックも重ね論文作成中。

研究成果の概要（英文）：1. There were pancreatic cancer patients=18(men=10,females=8). 2. There were nurse=10(females=10). 1. I interviewed patients for writing experiences of disease. These time were ① before start of Chemo-Radiotherapy ② before end of Chemo-Radiotherapy ③ end of Operation. I interviewed number of 18. Because I could meet some patients at end of Operation, some patients could not finish there therapy or some patients afforded me one time. Now I am analyzing. 2. I interviewed nurses for clarifying way of care to pancreatic cancer patients. I analyzed 10 nurses interviews, and released the result at JSCN.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：看護学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：がん、看護学

1. 研究開始当初の背景

人口動態統計（厚生労働省）¹⁾によると、膵癌の年間死亡者は年々増加しており、平成 19 年には死亡率（人口 10 万対）が 24,634 名となっている。膵癌は罹患数と死亡数がほぼ同じであり、難治性の癌の代表である。膵

癌は早期発見が難しく、手術が唯一の根治的治療となる。しかし、手術は患者にとって身体への侵襲が大きく、術後吸収障害による下痢が続き、栄養不良・大幅な体重減少・体力低下をきたすといわれる。既存研究では、術

後体重減少や QOL 低下がみられることが明らかにされている²⁾。近年は、膵癌に対する手術単独治療の成績が極めて不良であることから、術前化学療法・放射線療法が提唱されており³⁾、治療期間は1ヶ月以上となる。さらに、治療の副作用である免疫力低下を回復させ、術後腸炎のリスク軽減を図るために、1ヶ月以上自宅療養を行う必要がある。その後、手術適応であるか判定される。手術をしても80%にも及ぶ患者が再発をし、少しでも進行を遅らせようと化学療法を行うが、体力的に実施できない場合も多い。膵癌全国登録調査報告書⁴⁾による生存率は、切除後1年で50.1%、5年生存率は17.6%と報告されている。

筆者が病棟で働いている時、他の人はこの状況をどのように過ごしたのか、どうしたら乗り越えられるのかと、苦悶の表情で聞いてくる患者もいた。膵癌患者に関する研究では、術後長期生存者の体験や、死の受容が明らかにされている^{5),6)}。しかし、膵癌患者の悲痛なる問いに答えるための十分な資料はなかった。資料の少なさ故に、膵癌患者に対してどのような支援を行っていけば良いのか分からずに、心の葛藤を覚えている看護師は筆者も含め少なくなかった。そのような中で病棟の同僚は、術前治療中の患者の思いを明らかにしている⁷⁾。

参考文献：

- 1) 厚生労働省；
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei07/hyo7.html>
- 2) 坂尾雅子、他；膵切除後長期生存例の栄養状態と看護介入、金大医保つるま保健学会誌、26、65-73、2002.
- 3) 財団法人日本医療機能評価機構；科学的根拠に基づく膵癌診療ガイドライン、2006.
- 4) 日本膵癌学会；膵癌全国登録調査報告書

- 5) 伊藤登茂子、他；膵臓がん術後長期生存者のサバイバー体験の検証とケアの一考察 - 健康生成論的視点から -、秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要、17(2)、29-36、2009.
- 6) 三浦浅子、他；進行性膵がん患者の死の受容過程の分析 - 告知を受けた4名の Retrospective Study -、三重看護学誌、11、53-63、2009.
- 7) 松井歩、他；術前化学・放射線療法中の膵がん患者の思い、日本がん看護学会誌、24(Suppl)、211、2010.
- 8) 関本翌子；肝・胆・膵がん終末期患者の精神的看護・家族看護、がん看護、12(1)、61-62、2007

2. 研究の目的

膵癌治療は進んできているものの、予後不良であることは変わらない。膵癌患者は多くの苦痛症状を伴う中で、短期間で自分の置かれている状況を理解しなければならず、非常に辛い体験をしているという⁸⁾。予後不良であるからこそ、患者が残された時間をその人らしく、最適な QOL の状態で過ごせることは大切である。患者の闘病体験は期間で区切れるものではなく、看護支援もまた継続的にされるものである。また、看護支援の効果を見るためには、経時的にみていく必要がある。膵癌患者の生きた闘病体験や行われている有効な看護支援を明らかにすることで、今後、膵癌患者に対する看護師の支援プログラムの開発につなげていくことができると考える。

1)膵癌患者の闘病体験を記述し、生活の質がどのように変化するかを QOL 尺度を用いて明らかにする。

2)看護師が患者に対してどのような支援を行っているのかを記述し、看護師が日常で使

える支援を明示する。

膵癌は早期発見が難しく、予後不良の癌である。それ故に、患者の闘病体験を同疾患患者に伝える資料は少なかった。しかし、自らが病を患った時、他の闘病体験を知ることが疾患に対する受け入れや覚悟をする為に役立つと言われている。高齢化社会が進み、膵癌患者はさらに増加すると予測されている。病院や施設で亡くなる人が9割以上を占める我が国において、膵癌患者も例外ではない。QOLが低下し短い余生を過ごす中で、患者がどのような支援を必要としているのかを明らかにすることは、看護支援を行っていく為に大切なことである。

患者の身体的・精神的苦痛症状を軽減し、QOLを高め維持するために看護師がどのような支援を行っているのかを記述することは、看護の知的財産を共有することである。看護支援の可視化が必要と言われる中で、看護師の支援を記述することは、可視化に貢献することになる。また、膵癌患者に対する看護師の支援プログラムの開発につながると考える。

3. 研究の方法

本研究の目的は、膵癌患者の闘病体験を記すとともに、QOLを明らかにし、膵癌患者に対して看護師が日常で使える支援を明示することである。以下の3点に分けて実施する。

1)膵癌のため入院している患者に対して、治療前・後、手術後の計3回、半構成的面接を行い、膵癌患者の体験を記述する。

2)膵癌患者の面接時に、既存のQOL尺度を用いてQOLを測定する。

3)膵癌患者をケア対象とする看護師に半構成的面接を行い、行っている看護支援を記述する。

1)と3)は質的因子探索研究とし、逐語録をおこして分析をしていく。2)においては1)の分析内容と併せて特徴の有無をみていく。

1)膵癌のため入院している患者に対して、膵癌患者の体験を記述する。

- ・研究デザイン：質的因子探索研究
- ・方法：データ収集期間－平成22年6月～平成24年3月
- ・データ収集－半構成的面接。以下の3回に分けて行う。

①膵癌と診断され、化学療法・放射線療法実施する前②化学療法・放射線療法が終了し、手術する前③手術後、退院する前

・場所…看護師長や参加者と相談の上、指定された場所で行う

・所要時間…約30～90分

・方法…テープレコーダーの使用について同意を得たうえで行う

・対象選定－施設よりご紹介いただき、研究の目的・方法を説明し、参加の同意は研究者が行う

・分析－グラウンデッド・セオリー・アプローチ

・参加者－膵癌患者 10名

2)既存のQOL尺度を用いて、膵癌患者のQOLを測定する。

膵癌患者に対して、面接時に記入依頼し、経時的変化および面接内容と突き合わせて特徴の有無をみる。

3)膵癌患者をケア対象とする看護師に半構成的面接を行い、行っている看護支援を記述する。

- ・研究デザイン：質的因子探索研究
- ・方法：データ収集期間－平成22年6月～平成24年3月

・データ収集－半構成的面接

・場所…看護師長や参加者と相談の上、指定された場所で行う

- ・所要時間…約 30～90 分
- ・方法…テープレコーダーの使用について同意を得たうえで行う
- ・対象選定—対象看護師を募集し、参加可能な看護師へ研究目的・方法を説明し、同意書をとる
- ・分析—グラウンデッド・セオリー・アプローチ
- ・参加者—膵癌患者をケアする看護師 10 名

4. 研究成果

- 1)膵癌患者 18 名 (男性 10 名、女性 8 名)、
- 2)膵癌患者をケア対象とする看護師 10 名 (女性 10 名) であった。

1)闘病体験を記すために膵癌患者へのインタビューを行った。①化学放射線療法開始時、②化学放射線療法終了時、③手術終了時の 3 回インタビューを行った。当初の予定では 1 人の参加者に 3 回インタビューを行う予定であった。しかし、アプローチできた時期が手術終了後であったり、途中で治療が終了したりし、1 回で終了した場合もあった。そのため参加人数は当初予定より増やし、18 名へのインタビューを終えた。現在分析中である。

2)膵癌患者への看護支援を記すために膵癌患者をケア対象とする看護師へインタビューを行った。10 名のインタビューを終え、分析を行った。その結果を「大学病院で入院治療する膵癌患者に対する看護ケア」というテーマで、平成 25 年 2 月日本がん看護学会にて発表した。【結果】看護師は[予後不良という辛い現実の中で、治療に対する患者の希望を支える]ことを土台としていた。ケア内容は治療の時期で分けることができた。精査では[患者が病気をどのように理解しているのかを知った上で関わる][合併症に注意し、症状緩和に努める][1つ1つの検査を乗り越えていくよう、今を大事に関わる][状況に応じて

患者の選択を支え]ていた。化学放射線療法では、[ひとまず化学放射線療法を終えることに目標をもっていく][孤独にしないよう、いつも気にかけているということを態度で示す][根底に不安があると知りながら患者の前向きな気持ちを支持し、時期を見計らって思いを聴く][情報を伝えて不安を取り除く][副作用に対する観察・症状緩和に努め]ていた。手術は[手術をすると言う看護師とは相反する患者・家族の決断を支え]、[術後に対する患者の想像と現実との差を縮められるよう大卒の情報を伝え]ていた。術後には[異常の早期発見に努め]、[順調にいかない経過の中で見通しを立てられるよう情報を伝える][治すことのできない症状を少しでも緩和するために試行錯誤する][闘病生活の中で孤独にしないよう人と人として関わ]っていた。【考察】看護師は時に応じた患者の希望を支える必要がある。

現在、参加者からのフィードバックも重ね論文作成中。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)
犬丸杏里「大学病院で入院治療する膵癌患者に対する看護ケア」日本がん看護学会学術集会 平成 25 年 2 月 17-18 日 金沢

6. 研究組織

(1) 研究代表者

犬丸 杏里 (INUMARU ANRI)
 三重大学・医学部・助教
 研究者番号： 60594413